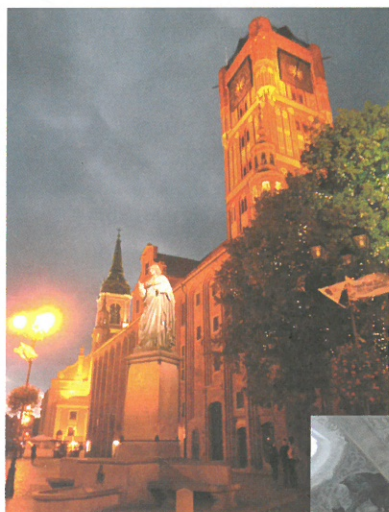


NPO JCP NEWS

No.29・2014.1.1

- ・シンポジウム「今、文化財が社会にできることⅡ」報告
- ・平成26年度「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」レベルⅡ～「陸前高田学校」～報告
- ・ポーランド世界遺産スタディツアー開催報告
- ・事務局通信
平成26年度定例総会報告
盛岡における「被災文化財安定化処理事業」始まる。



ポーランド トルンの夜景



陸前高田市立博物館 (旧生出小学校)



ポーランド ロント教会フレスコ画



福岡県飯館村 比曾芸能保存会の方々



ポーランド ワジェンキ公園 ショパン像

シンポジウム「今、文化財が社会にできることⅡ」開催報告

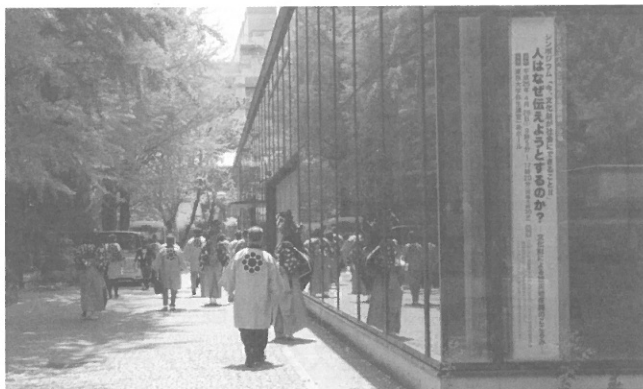
■企画の経緯について

今年度が始まって間もない4月25日(金)、26日(土)、東京大学弥生講堂において、NPOJCP 主催シンポジウム「今、文化財が社会にできることⅡ～人はなぜ伝えようとするのか?～文化財による被災地復興のこころみ～」を開催いたしました。

このシリーズのシンポジウムは、平成24年1月に第1回目を開催しています。従来の「文化財をまもる」という視点から、文化財が社会にどのように貢献しているか?という視点にシフトし、文化財が社会に必要なものであるということを検証しようと企画したものです。そのため、古文書、生活文化財、遺跡など、様々な分野の専門家に講演を依頼しましたが、折から東日本大震災の発生を受け、急遽、被災地で個人所有の被災文化財救済に必死に取り組んでおられる修復家をお招きし、厳しい現場の様子をお話し頂きました。結果として、平時においても災害時においても、文化財が人をつなげ、社会の力となっていることを明確にできたのではないかと思います。

震災から3年を経過した今回のシンポジウムでは、未だ復興の途上にある被災地に焦点を絞り、JCP が陸前高田市で文化財を救援してきた活動もふまえ、文化財のレスキュー活動が被災地の復興にどのような役割を果たしているのか?被災地の方々に真に貢献できているのか?を考察したいと思い、企画しました。そのため、より生活に密着した無形民俗文化財に視野を広げることが必要でした。

冒頭の特別講演では、東北をフィールドとして民俗学を研究されている学習院大学の赤坂憲雄先生において頂き、「震災・文化・復興」というタイトルで、外部の人間による「有形文化財」救援の難しさと、「命の発露」としての無形民俗文化財の意味をお話し頂きました。また当機構の三輪嘉六理事長に、阪神淡路大震災から東日本大震災迄の文化財レスキューの変遷と、



東京大学 弥生講堂



ポスター展示の様子

文化財の危機管理について講演をして頂きました。

事例報告では、福島、岩手、長野などの被災地において活動されている専門家にそれぞれ報告をお願いしました。陸前高田市立博物館の熊谷賢先生には津波被災文化財のレスキュー、相馬市博物館学芸員の二上文彦先生に相馬野馬追いの復興、双葉町教育委員会の吉野高光先生に原発事故の警戒区域における文化財レスキューの現状と継承の困難さについて、神奈川大学日本常民文化研究所の石野律子先生には長野県栄村の民俗文化財レスキューについて発表をして頂きました。特に無形文化財の継承については、いずれもコミュニティの維持と後継者育成に難問を抱えており、今後も非常な困難が予想されるとのことです。そのような状況下、被災前はイベント化されつつあった伝統行事が、復興を試みていく中で本来の神事としての性格を取り戻したという相馬野馬追いの事例は、無形民俗文化財の本来の役割を考える上で、示唆に富んだものであったと思います。

今回は、福島県飯舘村から、原発事故により全村避難を余儀なくされながらも、伝統の獅子舞を伝えようと稽古を続けている比曾芸能保存会の皆様において頂き、獅子舞の実演をして頂きました。この獅子舞公演



パネルディスカッション

時には、保存会のご家族や知人と思われる方が大勢詰めかけ、一気にムードが高まりました。勇壮な舞もさることながら、小さいお子さんを連れた家族連れや高齢者の方が、郷土の舞を嬉しそうに見つめ、カメラを向ける姿は、とても感動的なものでした。

後日、このシンポジウムについては、岩手日報の黒田編集委員が論説を書いて下さいました。

最後になりましたが、2回にわたり助成を頂きました（公財）朝日新聞文化財団様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。更に遠路お越し下さいました講師各位、比曾芸能保存会の皆様、心より感謝申し上げます。また、事前の取材に際しましてご協力いただきました飯舘村教育委員会、南相馬市教育委

員会、南相馬市博物館、南相馬市観光交流化、菅野パーツ様、会場をお借りするに当たりお世話になりました東京大学大学院農学部の清水謙多郎先生、弥生講堂事務所の皆様、後援を賜りました（公財）文化財保護・芸術研究助成財団様、（社）文化財保存修復学会様、文化遺産国際協力コンソーシアム様、藝能史研究会様、論説に取り上げていただきました岩手日報の黒田大介様、広報にご協力くださいました東京ケーブルネットワーク株式会社佐藤裕子様、朝日新聞社 宮代栄一様、日本経済新聞 松岡資明様に、この場をお借りして深謝申し上げます。（事務局 八木）

※詳細は、9月30日発行のシンポジウム実施報告書をご参照下さい。

NPO JCP シンポジウム参加記

大橋 有佳（東京芸術大学大学院 美術研究科 保存科学）

今回のシンポジウムを通じて感じたこと、それは、民俗芸能の継承における、人と人とのつながりが果たす役割の大きさである。民俗芸能を演じるのも、それを見て楽しむのも人である以上、それは当たり前のことかもしれない。しかし、例えば、災害に直面し、人々が地元を離れて暮らさなければならないというような困難な状況では、この「当たり前」はとても難しいものになってしまう。

福島県飯舘村比曾芸能保存会による「三匹獅子舞」の実演は、今、保存会の方々が直面されている様々な困難を吹き飛ばすような、力強さと活気に満ちていた。「三匹獅子舞」をはじめ、日本各地には様々な民俗芸能がある。民俗芸能を演じる人、楽しむ人、双方にとって、民俗芸能は地域の宝であるとともに個人の宝でもある。この宝を守り、後世に伝えたいという情熱こそが、災害に直面したときの地域コミュニティ復興の原動力になる。そして、地域文化財の保存を支援する我々もその思いを共有することで、芸能を演じる人、楽しむ人、我々のような支援者という人と人とのつながりが生まれ、そのつながりが、民俗芸能復興の一助となるのだと思う。

今日伝わっている数々の民俗芸能も、そうした人と人とのつながりを維持してきたからこそ今日まで途切れずその存在が伝わってきた。そうした人と人とのつながりの歴史があって初めて、私たちはそれらの民俗芸能を楽しみ、その力強さや活気を肌で感じるができるのである。

地域文化財の保存を支援する我々がなすべきは、民俗芸能の技術と形式の保存だけにとどまらない。むしろ、そうした技術と形式に関心を持つ文化の担い手たちをサポートし、そうした人々の間のつながりを維持する機会を提供することこそ、今、我々に最も求められる支援活動なのではないだろうか。



ろ、そうした技術と形式に関心を持つ文化の担い手たちをサポートし、そうした人々の間のつながりを維持する機会を提供することこそ、今、我々に最も求められる支援活動なのではないだろうか。

平成26年度

「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」

レベルⅡ

～「陸前高田学校」～ 報告

平成26年7月28日（月）～8月3日（月）、陸前高田市立博物館、岩手県立博物館において「陸前高田学校」を開催しました。このセミナーは、東京で行っている「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」のレベルⅡに相当するものですが、「陸前高田学校」と銘打って被災地で開催を始めてから早や3年。今年は被災区域から、3名の方が受講してくれました。主な会場である陸前高田市立博物館のスタッフは、館長含めて17名。その方達が講師となったり、受講側に回ったり、懇親会の準備も含めて大変な力となって下さいました。また、レベルⅠの修了生は9名が参加。その中から、はるばる大分県から来校して下さった林さん、陸前高田学校の後、ドイツへ留学するという宮西さんに、参加報告を寄せて頂きました。

陸前高田市と陸前高田学校のものと人々

林 裕子（別府大学）

池袋からの夜行バスを降りると、目に入る建物は全てプレハブだった。その周りには大きなショベルカーやブルドーザー。初めて来た陸前高田市は見るもの全てが被災していた。

研修場所の陸前高田市博物館は山間部にある。被災したため次は被災しにくい山間部に建てたのだと、現地を訪れるまで思い込んでいた。しかし実際は廃校になった小学校に運び込まざるを得なかったそうで、昔ながらの小学校に被災した様々な書物、古文書、民具



陸前高田市立博物館に収蔵されている和船

や船などが所狭しと並んでいた。

そこで実際に被災文化財の手当に関わっておられる方々も、やはり被災されていた。研修中に何気なくお話頂いた震災の出来事は、深く心に突き刺さった。しかしその悲しみや思い出、地元愛、文化財への想いが、終わりの見えない被災文化財への対処を続けさせてくれるのだという。



陸前高田市文化財調査員 村上覚見先生（中央）による民俗文化財の修復作業
右端は同館学芸員 及川甲子先生

数えきれない程の被災文化財に対し

て、陸前高田市博物館はどんなものでも救出するという信念を掲げていた。研修では実際に紙や民具、布など様々な素材の文化財の処理を体験させて頂いたが、どの処理でも多くの問題に直面した。解決方法のわからないものもあった。日々繰り返される単調な作業であるが、それぞれの文化財はひとつであり、貴重なものであるから、終わる事は許されない。陸前高田の方々の芯の強さを垣間見たように思う。

文化財に対して、真摯な態度で向き合い、対話をし、対応していくという基本的なことを陸前高田学校で改めて目と心に教えて頂いたように思う。

陸前高田学校の方々、この研修にご尽力頂いた皆様、貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。



陸前高田市を歩く筆者



林さんが宿泊した陸前高田市「鈴木旅館」 温泉と海の幸

陸前高田学校

宮西 みおり

以前から文化財の保存や修復に携わりたいと思いつつも、大学、大学院と制作を主として行う大学に進学し、なかなかこのような分野に踏み込めずにいた私にとって、昨年の文化財保存修復専門家養成セミナーのレベルⅠに続き陸前高田学校への参加は、本当に有意義なものでした。

中でも古書のカルテ作成、解体、洗浄の作業はかなりの慎重さを要する作業が多く、しかし私たちには比較的状态の良い古書が割り当てられたと聞いて、一冊の古書をよみがえらせることがいかに大変かを痛感しました。津波で被災した古書はカビのみならず多くの塩分や泥を含み、ただ古いだけではなく、二重にも三重にも手間のかかる作業を要するので、自分の携わった古書の修復の完成を最後まで見る事はできなかったのが残念でした。

しかし、修復すべき古書をすべて修復し終わるまでにこの先何十年もかかる上に、写真乾板等、まだほとんど手をつけられていない物もあるという話を伺い、改めて、この文化財保存という分野の難しさについても考えさせられました。

普段は保存や修復に関する様々な知識も講義や本から学ぶのみで、本物と向き合う機会があまりなかったので、実際に様々な物に触れ、体験できる陸前高田学校は、すばらしい学びの場でした。さらに、修復すべき物が津波による被災した文化財ということで、世界的にも前例のない貴重な経験であるとともに、こうした側面から本当にわずかながらではありますが、東北地方の復興に携われるという二面性を持つ魅力的なセミナーであり、また機会を作ってぜひこのようなセミ

ナーに参加したいと思います。さらに、文化財を守る方法を学ぶ私たちが、こうした分野をより多くの人々に広めていくことも、私たちのすべき仕事のひとつであると、改めて強く感じました。

最後になりましたが、このような貴重な機会を設けてくださったJCPの皆様、未熟な私たちを受け入れ、丁寧に指導してくださった陸前高田の博物館やボランティアの皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。



及川甲子先生による紙資料保存処理の実習



大型資料安定化処理のために造られた装置



東京国立博物館 和田浩先生による基礎講義「第一次保管環境の管理」



岩手県立博物館内「仮設陸前高田市被災文化財等保存修理施設」にて、「書」の安定化処理を見学

謝辞：このセミナーは、東京国立博物館、陸前高田市立博物館、陸前高田市教育委員会、岩手県立博物館の共催により、(公財)文化財保護・芸術研究助成財団の助成を受けて行われました。また、(公財)文化財保護・芸術研究助成財団、文化遺産国際協力コンソーシアム、一般社団法人文化財保存修復学会、日本文化財科学会のご後援を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。とりわけ、お忙しい中多大なご協力を賜りました講師各位に、この場を借りて深謝申し上げます。

ポーランド世界遺産スタディツアー開催報告

2014年度の世界遺産スタディツアーは、10月18日（土）から10月25日（土）の日程で、JCP 初のヨーロッパツアー「ポーランド共和国」を訪ねました。参加者19名、団長、副団長、事務局を合せて22名での催行となりました。

世界遺産でありショパン誕生の地、ワルシャワの歴史地区、同じく世界遺産の中世都市トルン、クラクフ歴史地区、ヴィエリチカ岩塩坑、そして、アウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所を訪問しました。今回のツアーのメインは、ワルシャワより西に230kmほどのロントという町にある教会（Church of the Blessed Virgin Mary and St. Nicholas in Łódź）への訪問でした。ここでは、ニコラウス・コペルニクス大学のエヴァ・ロズネルスカ先生に壁画

修復のレクチャーをして頂きました。また、神父様に教会内をご案内頂き、修道士の皆様と昼食をご一緒させて頂きました。

エヴァ先生と通訳をしてくださいました学生さん、また、温かくもてなしてくださいました教会の皆様にも、厚く御礼申し上げます。

また、このツアーにご後援いただきました団体各位、アレンジをしてくださいました賛助会員の㈱フレンドトラベル様にも、この場を借りて御礼申し上げます。

今回は、参加者の倉田治彦様（登録会員）と初参加の縣千恵子様、鈴木裕紀子様にツアーの感想をいただきました。

ポーランドを旅して

鈴木 裕紀子／縣 千恵子

コンサートの帰り電車を待つホームで、足立様より「ポーランドに行きませんか？」とのお誘い。二つ返事で「行きたい。」と・・・

何の予備知識も無く、ましてNPOJCP 修復のスタディツアー、少しはお勉強しなければと思いつつの旅立ち、「行って観たいな他（よそ）の国」の私共を優しく穏やかな気配、カトリック教が九割を占める安心感で入国しました。

初日のワルシャワ・ワジャンキ公園の早朝の散策はとても気持ち良く、待望のショパンの足跡も連れ大満足。彼の心臓の納められた聖十字教会でのタベのミサに預かれたのは、私共にとって嬉しいお恵みでした。

四日目はいよいよ今回のハイライト壁画保存修復の地、ロントの教会に向いました。フレスコ画制作上の困難さは多少知っていましたが、修復の実際の説明は解り易い映像と共に、素人の私にも理解することが出来大変興味深いものでした。後のお昼食は修道院の神父様方々と御一緒させて頂くと云う稀有な体験で、その上お味も最高で美味しく頂戴致しました。

旅の後半、人類の負の遺産とも云うべきアウシュヴ



ワジャンキ公園

イツ強制収容所を訪れた時は、行き交う各国の人々も皆声無く、戦時下と云えども人間の本质について、一段と激しさを増し降りしきる雨の中考えさせられたことでした。

次に訪れたヴィエリチカ岩塩坑は、対照的な迄に人々の営みの凄さに圧倒された美しくも驚くべき地下の塩の世界でした。

美しい古都クラクフ旧市街のゴシック様式聖マリア教会の御ミサでは祭壇の扉が音楽入り開き直後外に出た時、広場にラッパが鳴り響きびっくり致しました。

思いがけず変化に富んだポーランド、忘れられない旅と成りました。



クラクフ中央広場

皆様方々にサポートして頂き最年長組も無事帰国出来ました。末筆と成りましたが、先生方始め皆様様に唯々感謝申し上げます。



アウシュビッツ強制収容所にて



教会 (Church of the Blessed Virgin Mary and St. Nicholas in Łódź) での昼食

草原の国、ポーランドへ

倉田 治彦 (NPOJCP 登録会員)

今年の研修旅行は少し遠いけれど、2年前に行かれたケーキ店の方から「チーズ、チョコレートはうまい、そして美人が多い」と聞いて旅立ちました。確かに、帰りの私の荷物の半分は食物でした！

さて、ヘルシンキで成田発組と待ち合わせ、ワルシャワへ。ショパン像の有名なワジェンスキー公園を紅葉を踏みしめ歩き、その後、奇跡の復旧と言われる旧市街へ。地政学的にドイツ、ロシア、北欧からも攻められ何度も国が消えたポーランドの中でワルシャワも大戦にすべて破壊されたけれど、残った石1つさえ使って中世の町並みを復元、「破壊からの復元、及び維持への人々の営み」が評価された世界遺産です。

私は午後は同室のYさんと歩いてブラブラ、国立博物館へ。多量の絵画でしたが、1階に古い壁画を移設した室は見物でした。又、隣りのオープン・スペースは軍事博物館で、MIG 29 (戦闘機)、戦車、攻撃ヘリ、大砲がドッサリです。ポーランドは15年前にNATOに加盟、ロシアの兵器はどんどん破棄されている様です。



ビルケナウ



アウシュビッツ強制収容所の門
「働けば自由になる」

次の日はバスで3時間、城塞都市トルンでゆっくり、古い街を楽しみ (ジンジャークッキーがおいしかった)。



ワルシャワ旧市街

翌日は雨、バスで大草原を走り、おしりが痛くなった頃、アンネの日記でも有名はアウシュビッツ強制収容所。これでもかと悲しい物を見ました。

そして、次は地下300m下の世界遺産、ヴィリチカ岩塩坑。ここはともかく300kmの坑道と途中にある教会、広場、彫刻すべて塩。異次元世界でした。坑道をどこまでも歩き、登り、下り、(私は途中迷子になりました) 運動になりますヨ。



ヴィエリチカ岩塩坑
塩でできたシャンデリア

今日は中世の都 (京都の様な) クラクフ見学。バベル城の博物館でダ・ヴィンチの「白貂を抱く貴婦人」を見る事が出来て、ラッキーでした！

さて、ここからハイライトの「ロント修道院」の話です。バスで着くと、木立の中に美しい白とベージュ

色の僧院裏に大きな川が蛇行して流れ、仲々の風景です。

ロント修道院は13世紀当初はロマネスク様式の建築だったらしいが、14世紀から18世紀に改築が繰り返され、今に至るとか。

その歴史の中に1940年のナチス・ドイツの陰が色濃く、聖職者、修道士を含む152名が逮捕殺害された暗い時代があります。その後、共産政府の下、1973年頃から大規模な修復事業が始まり、今も少し修理は続いている。

私は仏像、仏具、仏壇の修理をやっていますが、日本の仏教寺院でも時代に合せ、宗派を変更し、仏像、仏具の改作は一般的です。この修道院でもゴシック、バロック、ロシアスタイルと混在していました。ですが聖堂、回廊、僧院の中を見物していると、すべてに美しくバランスのとれた



ロント教会 天井壁画



ロント教会の祭壇

“調和”がありました。白を基調に荘厳され、ドーム天井を仰ぎ見ると、フレスコ画の淡い色彩が優しく、細部に目をやると、祭壇等の修理、復元もすばらしい。13世紀に他で作られ、後、この聖堂脇祭壇として置かれているものは聖遺物が内蔵され、特に見応えがありました。

見学も終り、講堂で修復事業担当の神父、大学の保存の先生、日本語学科の学生さんが通訳として来ておられ、写真とか見ながらレクチャー。その後日本側からも質問が多く出て、すべてに丁寧に答えていただき、又、修道院のハードカバーの写真集、リーフレット、DVD メディアもいただきました。

今、思い出す内容を列記しますと、当初のフレスコ画はフォン・フレスコ（漆喰を塗り、生乾きの時描画する）だと。長期間の維持修理の困難な時代にドーム上部からの漏水で剥落・脱落がかなり進んでいたので下地漆喰ベースの復元から始め、当初の材料、顔料をハンドヘルド分析器により同定、下地はイタリア製の

同質の材を、顔料も同様のものを求め、媒材としてポリビニールアルコール（PVA）を使って描画した。新らしく描く部分は点描法を使って、オリジナルとの識別をつけたそうです。又、クリーニングはバキュームと刷毛による除去。酷い汚れはスポンジに水をつけて拭き取った。破断、層状剥落部は下地下に石灰液を流し込んで上から押さえ込んだそうです。又、湿度調整として灰を細かい粒状にし、混ぜ込んだ漆喰を高湿度の心配箇所を使用した。又、クラック部は注射器で注入したとか。

あと、私の気になりました所。この修道院で最も古い14世紀のフレスコの残る小部屋に入りますと、ロンデルガラス（ワイングラスの底板の様な円盤状の手吹きガラス）の美しい窓があり、これも当初のものが残っているのかと近よって見ると、上部に“AD2003”とエマイユで書いてありまして最近の作でした。中世の頃流行したロンデルの窓はポーランド中にたくさん見ました。帰国後、旧知のステンドグラス作家に聞くと、ポーランドに今でもロンデルガラスを作る工房があるそうです。伝統技法が受けつがれているんですね！



エヴァ・ロズネルスカ先生（中央右）による講義

これを忘れて終わってはいけません。ロント修道院で昼食も修道士の方々と共にいただきました。すべてに優しい、心のこもった料理でした。蒸しじゃがいもが美味しいんです。ケーキも！

あっという間の8日間でした。団長の澤田正昭先生、副団長の西浦忠輝先生、スタッフの松本洋子さん、現地日本語ガイドのカタジナ・シュチエパンスカさん、同行22名の皆さん、お世話になりました。

追記：ロント修道院で、質疑応答の中で学生通訳の方が顔料の媒材としてポリビニールアルコール（PVA）を使ったと言われ、少し疑問が残り、帰ってから調べてみますと、海外で全く別物のポリビニールアセテート（PVAc）がPVAで表記されて流通しているらしく、混同しやすいとか。ポリビニールアセテート（PVAc）の方であったのかと思うこの頃です。



ロント教会外観

*ここに掲載された写真の多くは、参加者の吉村一純様にご提供いただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。



ロント教会の前で記念撮影

JCP 事務局通信

■平成26年度定例総会報告

去る6月21日（土）、浅草文化観光センターにおいて、平成26年度定例総会が行われました。総会の模様は既にメールマガジンでもお知らせいたしましたが、改めまして平成25年度の決算をご報告申し上げます。

＜収入＞ 計	¥76,520,717
I. 一般会計収入	
会費	3,115,665
寄附	2,578,518
その他	1,064,000
II. 事業収入	
受託事業	58,569,274
自主事業	11,193,260
＜支出＞ 計	¥75,956,991
I. 一般会計支出	16,880,166
II. 事業支出	
受託事業	47,602,498
自主事業	11,474,327
＜当期収支差額＞	¥563,726

■ご寄付をありがとうございました。

また、被災文化財救援事業に対するご寄付の状況は、下記の通りです。

＜収入＞ 計	¥854,501
平成24年度繰越金	793,819
平成25年度寄附	60,682
＜支出＞ 計	¥279,010
関西 ER 技術者交通費	76,410
関西 ER 技術者日当	180,000
福島県被災地の調査旅費	22,600
＜H.26.3.31時点残高＞	¥575,491

■盛岡における「被災文化財安定化処理事業」始まる。

現在 JCP では、陸前高田市をはじめとした被災文化財の救援活動を行っています。いよいよ今年からは、盛岡の岩手県立博物館内に設置された「仮設陸前高田市立博物館被災文化財等保存修復施設」において、「書」「版画・水彩画」などの安定化処理が始まり、それぞれの分野の専門家会員が現地に赴き、作業に従事しています。該当する分野の登録会員には、東京国立博物館保存修復課長 神庭信幸先生の依頼文を添付し、メールで協力を呼びかけました。その結果、多くの会員が呼応してくれました。JCP の会員技術者達は、岩手県立博物館の赤沼先生など研究者と意見交換をしながら、困難な作業に取り組んでいます。

なお、エントリーして頂いたにもかかわらず、スケ

ジュールの都合などでお断りせざるを得なかった会員様には、申し訳なく思っております。またお声をかけた際には、是非ご参加下さい。

ご検討頂けますようお願い申し上げます。

これら被災文化財のレスキューには、会員や材料生産者の方々の多大なご協力を頂いております。ここに記して深謝申し上げます。

・上窪良二様／(株)岡墨光堂様／(有)根本様／長谷川和紙工房様／速水商店様／福西正行様／(株)枡表様／(株)ヤマトロジスティクス様／(株)弥生洋紙店様

●ご入会ありがとうございました。
(平成26年11月30日現在入会者数)

■理事	7名
■維持会員	15名(理事含む)
■登録会員	184名
■一般会員	116名
■学生会員	78名
■監事	1名
■評議員	2名
■賛助会員	27件
株式会社	宇佐美松鶴堂
株式会社	宇佐美修徳堂
株式会社	岡墨光堂
株式会社	桂文化財修理工房
財団法人	元興寺文化財研究所
京都造形芸術大学	日本庭園・歴史遺産研究センター
国富株式会社	長崎営業所
株式会社	芸匠
株式会社	光影堂
有限責任中間法人	国宝修理装こう師連盟
株式会社	坂田墨珠堂
株式会社	修美
株式会社	修護
株式会社	松鶴堂
宗教法人	正法院
中部資材株式会社	
株式会社	東都文化財保存研究所
日本通運株式会社	美術品事業部
株式会社	半田九清堂
長谷川 聡	
百元 節	
株式会社	フレンドトラベル
株式会社	文化財保存
山領絵画修復工房	
他 個人	3名

(アイウエオ順)

NPO JCP の活動に 参加してみませんか?

■登録会員：年会費 7,000円

文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。

登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

■一般会員：年会費 5,000円

この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

■学生会員：年会費 3,000円

大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

会員特典：季刊情報誌の送付

講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、ファックス、電話、メールにて申込用紙をご請求ください。折り返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申込ができます。

TEL：03-3821-3264 FAX：03-3821-3265

E-Mail：jimukyoku@jcpnpo.org

URL：www.jcpnpo.org

※現在 JCP では、東北地方その他の被災文化財救援募金を受け付けております。ご連絡頂ければ、振込料無料の振込用紙をお送りいたします。

皆様の暖かいご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・郵便振替 00120-4-10545
NPOJCP

・三菱東京UFJ銀行 四谷三丁目支店
普通預金 3960340
特定非営利活動法人 文化財保存支援機構
理事 三輪嘉六

・みずほ銀行 根津支店
普通預金 1727893
特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS

第29号

2015年1月1日発行

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

〒110-0008

台東区池之端4-14-8 ビューハイツ池之端102号

TEL：03-3821-3264 FAX：03-3821-3265

E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org

URL：www.jcpnpo.org

関西支部

京都造形芸術大学

日本庭園・歴史遺産研究センター内

TEL：075-791-8519

〈理事〉

三輪 嘉六 (理事長)

大林賢太郎 (副理事長)

西浦 忠輝 (副理事長)

増澤 文武 沢田 正昭

増田 勝彦 三浦 定俊

〈評議員〉

田邊 三郎助 荒木 伸介

〈本部事務局〉

八木 三香 (事務局長) 松本 洋子

〈関西支部事務局〉

伊達 仁美 (事務局長)